

ひらがなによる色彩連想

Color impression of Hiragana

牧野 暁世 *Akiyo Makino*

(デザイン学部教養部会)

1. はじめに

共感覚 (synesthesia) は、「一つの感覚の刺激によって別の知覚が不随意的に引き起こされる」現象と言われている。共感覚者の割合は、かつては10万人に一人などと言われてきたが、最近では23人に1人とする調査や芸術家でない人よりも芸術家に7倍多く出現するとも指摘されている。共感覚の種類は150種類にも及ぶとも言われており、もっとも多いのが文字や数字に色を感じる「色字共感覚」(grapheme color synesthesia) である¹⁾。また、web等を利用した数千人規模の調査²⁾の結果から、特定の文字が特定の色に結びつきやすい(例えば、アルファベットのAは赤など)傾向があることが示唆されている。これらのことから、文字に色を感じることは少数の人が持つ特性ではなく、すべての人に共通し、さらに表現行為などと関係が深い可能性が考えられる。そこで、表現行為に携わる本学の学生を対象にして、我々になじみ深い「ひらがな」に、どのような色彩印象があるのか明らかにするために、本調査を行った。

2. 調査方法

2.1 調査対象者

本学デザイン学部デザイン学科男女計39名。

2.2 調査材料

2.2.1 色票

PCCS (Practical Color Co-ordinate System; 日本色彩研究所、1964) に基づく、8色相(2:赤、6:橙、8:黄、12:緑、16:青、18:青、20:青紫、24:赤紫) × 4トーン (vivid, light, dull, dark) による、有彩色計32色と、無彩色4色(w, Gy6.5, Gy3.5, Bk) を合わせた合計36色を用い、色票を作成した。色票は、A4版、グレイ(Gy5.5とGy6.5の中間色)の台紙上に、それぞれ2cm × 3cmの大きさに切ったチップを6列 × 6行でランダムに貼付した。

2.2.2 刺激語

ひらがな計 71 語 (清音 46 語、濁音 20 語、半濁音 5 語) を用いた。

2.3 課題

71 の刺激語について、もっとも適合すると思う色をカラーチャートからそれぞれ 1 色ずつ回答させた。回答の際、質問文にあまり深く考えずに直感で行うことや、同じ色を何度選んでも構わないことを記述した。回答紙の冒頭には回答例を示し、ひらがなの配置順は、「あ、い、う、え、お」を始めの 5 音として配置したが、その後はランダムにした。

2.4 調査環境

質問票と色票を調査対象者に配布し、各自で回答するよう求めた。その際、場所、回答時間は指定しなかった。調査期間は 2006 年 6 月 13 日～6 月 20 日だった。

3. 結果と考察

表 1 に、ひらがなに対して選択された色票の得点を記す。

これらの結果に基づき、各語から連想される色の色相およびトーン（明度・彩度）の関連を考察する。各色相でもっとも多く選択された語は以下の通りになった。表2、3に記す（上位5位まで）。

表2 ひらがなにおける色彩印象の色相別選択順

色相	選択された語（得点）
2（赤）	あ（26）、ち（15）、ひ（15）、ぢ（15）、ま（14）
6（橙）	ぶ（15）、く（14）、み（13）、に（12）、ら（12）、た（11）、て（11）
8（黄）	い（21）、き（18）、り（14）、れ（14）、げ（11）
12（緑）	き（14）、わ（11）、え（9）、や（9）、よ（9）
16（青）	そ（11）、す（8）、と（8）、ぼ（8）、は（6）、よ（6）、る（6）、が（6）、げ（6）、ざ（6）、ぞ（6）、だ（6）、づ（6）
18（青）	そ（16）、せ（12）、す（11）、う（10）、さ（10）、し（10）
20（青紫）	む（12）、な（9）、ぬ（8）、ゆ（8）、ず（8）
24（赤紫）	ぢ（17）、も（15）、び（12）、び°（11）、べ（9）
無彩色	ん（28）、し（13）、つ（11）、を（10）、ぎ（9）

表3 ひらがなにおける色彩印象のトーン別選択順

トーン	選択された語（得点）
v	あ（32）、か（23）、う（22）、い（21）、ち（19）
lt	さ（27）、す（27）、び°（27）、ぶ（27）、べ（25）
d	づ（16）、ず（15）、べ（15）、ま（14）、じ（14）
dk	げ（27）、ど（25）、ぬ（21）、ぼ（21）、ぐ（20）、ぞ（20）、だ（20）

ひらがなにおける色彩印象の色相別選択順として、その色を連想させるような特定の意味を持つもの、たとえば赤の色相では、「あ」（赤の頭文字）や「ち」（血の色を連想）が多く選択された。また、無彩色では「ん」がもっとも多く選択され、これについて「最後の文字」と「もっとも暗い色」を対応付けたという内省も得られた。文字と色との結びつきは、頭文字によるプライミング効果（たとえば、Bは青：blueなど）が影響しているとも言われている³⁾が、語による連想と色彩印象による意味的なつながりがあると考えられる。また、青の色相において、サ行のすべての語が上位に選択された。これは、サ行の息が口内を通る音を利用して発音するという、音の特性に対する印象（清涼感など）と関係があるのではないかと考えられる。

ひらがなにおける色彩印象のトーン別選択順として、v（鮮やか）トーンではア行の

語が多く選択された。また、lt (明るい) トーンは半濁音、d (くすんだ) トーンや dk (暗い) トーンでは濁音が多く選択された。これらのことから、語の音などによる印象とトーンの印象が関連を持ち、選択に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

4. 結論

本調査ではひらがなによる色彩印象を色相およびトーンの観点から検討した。その結果、各色相では、その色を連想させるような特定の意味を持つものが多く選択されたとともに、語の持つ音の特徴ごとに選択された可能性が示唆された。また、各トーンでは、清音、濁音、半濁音ごとに特徴が見られた。ひらがなによる色彩連想の心理的メカニズムを検討することによって、ひらがなと色彩印象の対応づけが明らかにされれば、それらを活かしたより効果的なコミュニケーションが構築できる可能性がある。ひらがなによる色彩印象形成のメカニズムをさらに詳しく検討していきたい。

引用文献

- 1) ジョン・ハリソン (2006) 共感覚—もっとも奇妙な知覚世界—。新曜社。
- 2) Sagiv, N., & Ward, J. (2006). Cross-modal interactions; lessons from synesthesia. *Progress in Brain Research*, 155, Part 2, 259-271.
- 3) 長田典子 (2010) 音を聴くと色が見える：共感覚のクロスモダリティ。日本色彩学会誌 第34巻 第4号 348-353.